

九州大学法学部卒業。裁判所書記官を経てNHK入社、報道部、考査室勤務。平成2年定年退職。

## 「福祉ボランティアを生きがいとして」

私は4歳の時に小児まひに罹り、右脚が不自由な障害者になりました。

私が生まれ育った昭和の初めから終戦までは、障害者にはとても生きづらい不幸な時代でした。「富国強兵」国策のもと、障害を持つ者は国に奉仕することができない「足手まとい」として、軍国主義社会への参加を拒否されたのです。私も小学生時代から終戦の中学3年まで、体操(体育)、遠足、運動会、遊びなどから「仲間はずし」にされ、先生からさえ「厄介者」扱いされて、「学校社会」に参加できませんでした。

昭和20年8月の敗戦は、国としては不幸な出来事でしたが、障害者にとっては「人間復権」の光明をうれし涙で仰いだ日でした。

16年前に会社を定年退職した時、これからの人生を、何を生きがいとして、どう過そうかと考えました。60年間無事に生きてきた自分へのご褒美に、旅行やグルメざんまいで暮らすのもよかろう。しかし、それでは何かむなしいような気がする。あれこれ考えているうちに、私は忘れていた大事な事に気づきました。

「そうだ、私は障害者だった。学生時代から社会人として働かせてもらった昨日まで、自分としては他の人に迷惑をかけないよう頑張ったつもりだが、どれだけ多くの人たちのお世話になったとか。これからも、年金を頂いて老後生きさせてもらおう。であれば、残された人生の中で少しでも社会のお役に立つことをして、お返しをしよう。」

私は早速、地元の障害者団体に入り、役員として障害者仲間のお世話を始めました。

また10年ほど前から、同じ障害者仲間と共に、そのころ盛んになってきた小中学校の福祉体験学習のお手伝い（指導）を始めました。「車いすに乗ってみる・アイマスクと白い杖で歩いてみる・点字で読み書きをする」。この学習のお手伝いなら、私たちは毎日（仕方なく？）やっている、いわばプロだ。また実技だけでなく、私たちが街で出合うさまざまな悲しいこと、悩みや生き方も話そう。そうすれば、これはわれわれ障害者にしかできないユニークなボランティアになる！。

私たちと一緒に学習してくれた子どもたちは、今年で7万人を超えました。この活動をしていて、しみじみ思うことは、これは他人のためではなく、私たち自身のための活動だということです。

もちろん、活動の第一の目標は、子どもたちに、他人に対する「やさしさ・思いやり」の心を育ててもらい、それを地域社会に広めて頂くことです。ところが「情けは人のためならず」のことわざとおり、子どもたちを通して社会に広まった「やさしさ・思いやり」の恩恵は、回り回って私たち障害者自身に返ってくるのです。

この活動を始めてから、大げさかもしてませんが、私たちの人生観が変わりました。

「福祉の恩恵を受けて生きている」「社会の人たちに迷惑をかけて生きている」という、いわば「負の人生観」から、「いささかでも、社会のお役に立っている」という誇りを持って生きられるようになったのです。私たちにとっては、この誇りこそ、「社会に参加している」という手ごたえ、生きがいなのです。

私は今76歳、もはや秒読みの人生です。でも私は、体力と気力の続く限りこの活動を続けるつもりです。